概

忠孝堂

大通信

特別
イ 4
3159
B 19

14
3159
B19

大通傳叙

新誌有之曰娘兮何之為也。燈燭之影。為
思男。將脫陰門之毛嗚呼大通哉斯指剪
髮出世人之所為也豈賜陰門之毛余歟
而作此書而公之于四方熟讀之思須臾
平娘之通云爾
如永丁邦之春正月
文學不知之道人黃燮京拔筆於淳

二十五箇條目錄

金銀の事

伽羅の事

婚姻の事

大名の事

一産の事

ハ女なりての事

自由の子とゝ[illegible]

居住の事

一高あふまりて[illegible]

史記の
起人一生の
涙をの
如即此上の
心中の
四十年の
雲をせく
陽を
紙を
如即を待

第一

人生の安の最上なるものは男
女なり生ぜんとおもふべし

第二

伽羅をいとうて色をやぶし人の気をそこなふ
なり焼香炉の和合せる人の気をやすらかにするものなり

第三

呼吸の時強く吸て弱く吐いとしべを
強く吸ふなり吐を呼絲もなりますといふ

所は十ぶんにそなへ不審をうたがはぬあるべし

第四

大せい大連中をもそなひのときめしかの巻を
うけあるべき如命のもとにはなるのまはりとなるもの
なり拍子をつくべきなり其の外の
遊方北者はこれをもうるなるものなり

第五

一そのはなるかの命のはなはだ生ぜざるこころ
なり如命もなるべしなるべしこれからまなれ

宮田製

なるはいうまでもなくうるなるなるなるし
そかなり不まそは好ぶ命なり人を見せ親
はいかぬもしし

第六

心やすきなりたるなるなるなるなるし
之信をもとにいかるもとにかるのなれ
ちかれるなるし

第七

たとえなのまるもとにはなるのり
うちなるなるし

第八

ゆき雲をなるる月をしたひて又ゆくへなき心ばせ
きなり人間しのぶるとこそ言なり

卯八

五月雨のつれづれにさそふて花ちる庭の
くらい首尾がわるなるかまたはさる縁とお
もふべし

卯九

面あいをけまいとおもふはなるるもいは
ぬがよし又問もせぬこれなり

卯十

わるふ思ひは火遠きそなたにつるもの
なり不首尾なる命をつるべし

卯十一

花ゆかなくず疑ふものなれども人の
おもふ如戸のそなたはすゆくがの
ゆるる覚もなし

卯十二

あまた如戸のふる事をおもふてこと
ゆるるふ人のなるなり人を
の如戸にもたるゆるをおもふて

いはんなり家あるなれはいはんなるもとふ
ものし

卯十三

如月の末北うさ流あるともそふ歌が
心うるをそなのに無なといふとあるるもな
るし

卯十四

四月して見る花紅葉大方
過るものし紅葉の葉除るなるへ
紅ゆまいるもの花なるもの

京田製

たゝえ今日の別れし

卯十五

四月ものもの色なりなるもの
そいなり如月ものであるとなもふ

卯十六

家をせんはなるなり多くの家の
中まで我と心まるものしし

卯十七

陣のまる色のもの卯もとも
後住かもしのあるもの

卯十八

紙を居えるものなり其の不死(田)の如し

卯十九

来る如きを待て居るときは必ず其ふまるものなり

如何ともなすべからざるそ

如何も安堂寺町なるは安心なり

と雖ども安心なるは安心なり

卯一なりとくるものなる

が情なり

宮田製

卯二十

如何ばかりかいろこのふが情なりけるか

りかしこいはけんらとなり

卯二十一

張ばかりは如何も我も情やなし常と

我内よりの原引と聞ふて私たる格別

のものとこの張ばかりは殊分なりて

いるくいるとなる

我も張ばかりなくなるこなるものなり

そこで死なり卯なり

卯二十二

あるは親なる八男にたゝんのふさぬ
とゝうるはなるはなるの手紙をも
又男となるばかりふのくおりすることと
いゝしゝ心なるはいにもちかんもこゝろ

卯二十三

なるはまことなるなるとおもふが家なり
家ごとにまことにもふかうなるこゝろ
が花なり

卯二十四

宮田製

卯二十四

家にもとのあるとおもふこゝろを
ちゝとなるこゝろ家のあるとの心まひこ

卯二十五

世の中の話の所おもふとなるこゝろ
乃性を美性をとりあるのなるより
実をあるまゝ人をわすれあるさし
くるとなるなるを悪不とはなるの
ふやうと出りしら金がほしくなる
ゝ鑑に知ぐる文を換ふ人

故ゑ爲ものとはいふるし

口傳

女郎買の心得の大意

金銀たくさんを有てこれい親なくこれ家
家業もなく情乱業女郎をもつて不動
産をもて家業とかもつぱらなずんくもつくるもの
名聞の人を紛かすより外遊興のことを
思ひず強盗するたつて男にさきをく女郎
と成ものゝ家と傳ふ女郎もつぱらかすやう
な知れたきまて一ぱなる興ゆるなる遊もい
ふとも金のやくそくにらそをいはず大

笑ひなすもとのもとに戸を閉ぢ物
あはれ人にて家人の泣くやうに
ものいんとして ものつかひ ものさうぞく
上ふ下ぢ内ぢ ていそうに金をやりて
名ぶをもとめ ますます貧乏人犯人の
親の目の仕事を大事にして ものを
宿ひ家をしる 床の座布団なりて
まのあるもりに なく如の物をかる
まをおりて 此もくの物はなりまはもて
ゆるはなる はなはだ門口まで なりお

宮田製

つるを金子乃まで ぬけ出ていとはず
名ぶをもみこの世をさるまで
のしはらうふ乃形乃ものを
るをいつまでも 形をまて
ゆるし是ぶ上ふ出を極悪の如
貧とをるし

女郎買原を乃巻

あはあらうやさくまかめらうし
ものらは酒おりはなりあらうは
祝ふ客みの働まあるぶし酒と

品下まもり色子も三国国のたうまし
ちすり教授のひらき事ありしかば
と一切なりとなる法華経をとくこそ
既をあそぶ仏の罪科なし若は
如来のかしこまりをもそむきもせ
ぬ心をもつ人ひとりだにしかば
教主釈尊は一切衆生の父
母なり父母の子を捨てん
ほどの人は一人もなし
されども法華経をすてて
ながらこそ
宮田製

別の家の法華経をもすてもはてぬ
ものなれば
ものとなるべきこそ
さらしなりてはいまだ
なれば人々はの如来
まにはまに又法華
てもそれは貴ものを
余の経を引よせ
百人が百人千人が
はしくあるべ
ら後悔すべ

いづれも宮のより立て変化に陽通はして
を[illegible]頭るくもりてまいる宮さしたるは
勅意と意と宮のかけてとなるは紀
宮の[illegible]ものとなるしまたはさ
をなるの狐原をあてはは狐を[illegible]
さすが将人も[illegible]の情緒を金泥をは
いやしくもエ夫をう通しかけ人る
るもしたるまてはまたはは
の化宮が意をとうそがいたる成が出
全て弱の[illegible]弱の[illegible]の縁と

宮川蔵

もなるものをとれはいつも人を[illegible]
[illegible]見るみをはあるは強は成の
宮を買はるもしも成が買をあとた
らは軍くやうう高上を化をれも
とおすは狐原へいはつて
宮川蔵

内道秘鍵　一巻　一冊

弘勒光明寺述

序　辛亥春三月　山陰獨覺子

山陰傳　阿毘阿七譯

跋　壬子　弘勒光

宮内製

署と紛れの仕方のてもと

一美濃紙杉原に書て其名を付てしるすもの

一糸入り、前へ名をやきはなしこそ、のてしやり

ちやうとゝふていつゝ成せぬもの

一名を多くあるは猶なにのかしらるとそさ

の、内の名を伺ひ白紙を糸こ入神い

分ぬ出し細川を入りかりうみて好者

一糸入おなれすきゝ前の用ゝ名のゝ

変りあんとゝもしゝ

うしいは紙ゝ成ゝとけ

宮田製

一はぎすがたもわるくやはり嫁でやとしふるもの（なさん）

一ふるまひ一切てきるつき合ひ[illegible]て内

[illegible]やんすわるくやはり内ぶるくるいこと

いふふいと一ますなどいと。中ちとしそ

小ふになつてきるやはるもの

一ふえりさ家はたしてくやとちかあれ

どもいつまてもたぞこすわるくたもの

をなきこと

一新色ゆりまを出仮令ば塩者の新妙花

一吸多葉形　丹後　一息弟次出世絵者

宮田製

但し出世絵ニモ色極彩絵ハ有之と云ハ一世と

イとふて内出するいきを

一型とふるを出してたら一つ塩とさんに清

納おさこしやつるこ上てそんさとしふもの

一ふまてゆぐとりざるこの

一型さなは上はこのとおさ。おりんどのとやは

あいこんきんちとしふもの

一ふをもつて紙まてアハ暑と就をあふく者

一髪の化とうこうすり毛筋のあてる者

一多葉形を者あとて内吹の上に長筋を

ゑくち

一中毒とは気付て看又は吸物などを客へ
めてをくこと　わしや蝋燭やとぶて吸ふの
一綿絮の油いまて目をぬぐうこと
一茶一入うりはけてなつてたはこ屋若
一中毒をたばこすいつけさすこと
右竹ケ原いもうとめ親所を経ばなしてもらる
事なりとは云ども内を知心のねうこゝを注
ふうとのこと

宮田製

ふしん方　のしを貸し事と
らんちう　屋敷ふる事と
いたかしら　おしよくとふ
上総木綿　ぢのなき客をふ
むやたん　なりき客をふ
うんちき　右同
ものふて　いなうものをふ
西南の空飛　しつぽうをふ
長竿　なくきとふること

出もの　右日記

ちゃらこつ　弁口そあやなす人〳〵をも

ちやう　こそつく人をなぞへこと

くぶる　もこそをふるふこと芝居に出つ

いきな男　男をかきてすいこと

大吉　小悪　せこせわるいことをふること

黒い　役者評判記より出そう吉のこと

白い　右日記　醤のこと

出ぶうりい　ぎーのたもむをもふ

喰のめす　なやなすをそうさをふ

打捨てる　女郎蜘蛛はは出る

かなわあとふることものこ　ぬはふ

東京都立中央図書館蔵

通言　（辰巳之園）

ばからしい

こそけぬこ

よふなてなこつ

ぐふーやこのふ

けーかからぬこ

ろしまこ

なこらつちもこ

きいてなきまる

かくらふものぐ

ぢいそぬこ

ふーらつ

おきのどく蠅のいろいき

以上

松下玉扇四家言語解　傾城鶴

○松葉屋言

おすごさりますとふすし

さつちやらーておんなんー

ちつちとふいかるつきーつちとも

かしてつちとすいなーて

つちとすとしふみよ母

これく　下ろ紙をさーて

れく　まくでおすなぞこ

きいーたく　まくくと

出ーきつて　ぶびそくを出ーきつて、うめ

しのびをこある　れを出ーきつてなそふ

ひそうちふ

とすちるる

東樓原製

じをつふも

○丁子屋言

ざんす

三味線ちん　ふち神のやくと

丁ふるるるかそうず

きつぃふじやれやーた

わつちやアいや

ごくとちんし

いやおーじぶらけね

はちれへのふ

何ぐざんちう

きんれい

おーこのーこ

きちげへじみん

何とでもおいくなんー　なふらく　よきしふそ

ちすつとこなほめらく　ぬちらもそ

いこあのぐらけは　あつけのさやく　そなるふる

○角玉屋言

うんなくー　そなくとふう

きなすぐ有るよ

あきんけへるよ

もちんこゃの

ばちくもてこるし

ちやきく　ふられそし

ぬきへさうん

東樣原製

よくらーひ

○扇屋言

うんぐんあら

だんを

ちらくー

あつへさん

きふふうとらる　きるふふうとらる

きんじなもんぐね

ひねる　ねすむこるもるる

以上

○
でも甚
おながす
ぢを
きりゐな
あふ
ころす

東京原製

○つき年一号のなぬ中ニ井月心仙老
年ハ十六なれとも大ふろさくいろつて
ふつてくも村のおきんハ色をこつちり
と付人ぐろよくあいきやう白さらハ
小髪ハ一つぶよゆい丁ゝらくこの白
いぶしをあちらさまいちり花のぶしにて
紫ちりすゑ糸と紙糸であら磯
をかひつてくりをとりしかくも
くをと肩部門が仮又ぢさて茶
ち相をわつく笠チヨロの平ごけ

をくらのまき姿みす紙つまり

もちゝ人

東京本郷区

仙三郎